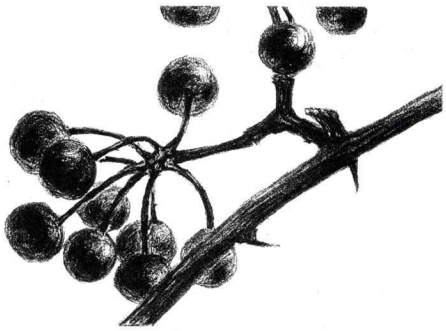
朝日 歌壇 俳壇



〈サンキライⅦ〉　日高理恵子

俳句時評　澤好摩の美しい抒情

阪西　敦子

7月に客死した俳人・澤好摩を偲ぶ会が11月4日に都内で催された。

1944年生まれの澤は、63年に東洋大学に入学して作句を開始。在学中に坪内稔典と出会い、その縁から68年に大阪へ居を移す。69年に坪内らと同人誌「日時計」を創刊。その後も複数の同人誌の創刊に関わった。仲間を求め、人と人とをつないだ人だ。帰京後、前衛俳句の旗手・高柳重信が編集長の「俳句研究」の編集助手をつとめ、変化していく俳句の動きや新たな作家の登場に立ち会ってきた。折々に出会った人々が偲ぶ会に集い、句業と広やかな人柄が語られた。

参加者には、澤を顕彰した2冊の俳誌が献呈された。一冊は、澤が最後に創刊し、死の直前まで作品を発表した「円錐」。旺盛な活動と交流を克明に記す年譜や、19人の追悼文が掲載された。「人間存在のかなしびや孤心、そこから発する人懐かしさとでも言うような美しい抒情」という澤の同志である味元昭次の証言は、澤が目指したものを言い当てている。もう一冊の「翻車魚」では2014年に芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した『光源』を含む既刊の句集と、それ以外の句から「澤好摩の百句」を高山れおなが選・鑑賞している。

〈曇天へ馬駆け込めり桃の花〉は、馬が好きだった澤がその躍動を詩情豊かに描いた句。〈寒雲に片腕上げて服を着る〉は、服を着ることがもたらす雲と人の接近が新鮮だ。〈折紙をひろげて皺の日永かな〉は、皺に宿る時間を愛おしむようだ。長く広い句業を展開する、さらなる顕彰と継承を待ちたい。（俳人）

◆31日の歌壇俳壇面は休載します。1月1日の文化面で8選者の「新春詠」を掲載します。

風信

第6回笹井宏之賞　書肆侃侃房主催。大賞は白野さんの「名札の裏」（50首）に決まった。副賞として歌集が出版される。

大辻隆弘著『岡井隆の百首』　歌誌「未来」の編集発行人を岡井隆から引き継いだ著者による一冊。30冊超の歌集から100首を選び、鑑賞とともに紹介。歌風の変遷の解説や年譜も巻末に収めた。（ふらんす堂・1870円）

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。

高山れおな選

僕たちは誰の味方か虎落笛　（北名古屋市）月城　龍二
生き方を師走の街に見られけり　（厚木市）北村　純一
大阪から飛び込み続く冬銀河　（福岡市）釋　蜩硯
老齢や子供の声で咳きぬ　（東京都）竹内宗一郎
枯山に迫る夕闇薬喰　（東京都）野上　卓
鯛焼の一部始終を見て二つ　（長野市）縣　展子
松風のごとく釜鳴りにら雑炊　（横浜市）猪狩　鳳保
遺影にと君と撮りあう小春日の　（所沢市）高橋裕見子
黄金の茶室の如き銀杏散る　（小城市）福地　子道
冬山や山に眠れる山男　（大村市）小谷　一夫

【評】月城さん。世界中をさまざまな分断が覆う時代。上五中七の立ち尽くすような感じにどきりとした。北村さん。この「生き方」にもどきり。一体、何をしたのだ。釋さん。阪神優勝から1か月。道頓堀ならぬ冬銀河への飛び込みとは豪快。

小林貴子選

ジャズの音の輝くホットウイスキー　（小山市）倉井　敦子
成るように成ってゐる感じの林檎　（盛岡市）菊地　十音
落ち鷹の高き一声母逝けり　（春日部市）田中　政子
学校で何かありしか木の実踏む　（福岡市）松尾　康乃
世渡りの拙き身にも除夜の鐘　（さくら市）青木　一夫
簡単に見えてなかなか冬構　（八代市）山下しげ人
寒茜きょえきょえと鳴く信号機　（横浜市）込宮　正一
あかぎれを案じてくれし夫は逝き　（防府市）山口　正子
湯豆腐やどうにもならぬ話され　（いわき市）佐藤　朱夏
杏子去り好摩も去りて落葉霏霏　（加古川市）伏見　昌子

【評】一句目、ジャズの音が輝くとは素晴らしい演奏、そして美酒。二句目、林檎はじっくり実り、泰然自若としている。三句目、秋に南国へ渡る鷹が途中で落命することがある。それを落ち鷹という。十句目は個性豊かな俳人の澤好摩を偲ぶ。

長谷川櫂選

沖縄を八十年のほほかぶり　（福島県伊達市）佐藤　茂
十二月八日といふが直立す　（長野市）縣　展子
夢のあと厠へいそぐ寒きびし　（四日市市）小谷　恒夫
花の神と呼ばれし父や冬薔薇　（寝屋川市）今西　富幸
公魚の眼の美しく凍てにけり　（高崎市）本田日出登
大いなる橡の落葉を掃く音か　（桶川市）玉神　順一
若き愛みかんは皮に包まれて　（熊谷市）内野　修
テレビ消し戦死者消ゆる空つ風　（東京都）漆川　夕
焼藷屋いつもの空地にはをらず　（高山市）大下　雅子
ロンドンでおでんを夢に見た日かな　（東京都）松木　長勝

【評】一席。「ほほかぶり」とはまさに。福島、戦争、沖縄をテーマにする人。二席。「直立す」もまさに。日本には直立する日がほかにも。三席。夢もさめてしまう非情な現実。八十四歳。十句目。ロンドンの街角におでん。似合いそう。

大串章選

曾孫と卒寿の夫と日向ぼこ　（泉大津市）多田羅初美
焼芋屋いもの産地をこまごまと　（川越市）大野宥之介
杖いらぬ卒寿ばかりの忘年会　（飯塚市）古野　道子
駅ピアノ空港ピアノ冬あたたか　（熊本市）加藤いろは
水鳥の飛び立ち湖面軽くなる　（大村市）小谷　一夫
熱燗や何時の間にやら聞き役に　（柏市）藤嶋　務
六十年書き続け来し日記果つ　（島根県邑南町）服部　康人
方言の里を問はれし日向ぼこ　（塩尻市）古厩　林生
凍滝の芯より水のこゑ聞ゆ　（栃木県高根沢町）大塚　好雄
駅伝の終りし道を焼芋屋　（栃木県壬生町）あらゐひとし

【評】第1句。曾孫は孫の子、卒寿は90歳。ほほえましい情景。第2句。「こまごまと」が懇ろで佳い。この「産地」は焼芋屋さんの故郷だろう。第3句。「卒寿ばかりの忘年会」とはすばらしい。人生100年時代、次は白寿を目指しましょう。